

修士論文（要旨）

2011年1月

脊髄損傷者の日常生活動作に関する現状と高齢期を想定した予測との差異  
ー自己効力感との関連を中心としてー

指導 長田久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

209J6004

松井伸子

## 目次

第1章	研究の背景	1
1.1	はじめに	1
1.2	先行研究	2
1.3	研究の意義	3
1.4	目的	4
1.5	リサーチクエスチョン	4
第2章	方法	4
2.1	対象	4
2.2	手続き	4
2.3	分析方法	6
2.4	倫理的配慮	6
第3章	結果	6
第4章	考察	9
第5章	今後の課題と展望	13
第6章	まとめ	14
	文献	15
	図表	17

資料

## 第1章 研究の背景

### 1.1 はじめに

わが国における脊髄損傷の疫学調査によると、脊髄損傷の発生頻度は人口 100 万人あたり年間 40.2 人と推定されている<sup>1-2)</sup>。新規脊髄損傷患者数は毎年約 5000 人とされ、慢性期を含めると総患者数は 10～20 万人以上と推測されている。

脊髄損傷者の生命予後は、この半世紀の間に著しく改善されている。その生存率は 50 歳以上の頸髄損傷者を除けば健常者とあまり変わらない状況になってきている。

### 1.2 先行研究

本邦では ADL と生活の質(Quality of Life 以下 QOL)の関連、QOL と社会的不利の関連についての報告は数多くあるが、脊髄損傷者における自己効力感についての報告や、退院後数十年が経過し、日常生活を取り戻している脊髄損傷者の加齢的变化、ADL の意識についての報告は少ない。また、脊髄損傷者が日常生活動作において高齢期を想定し、自身の動作能力がどのように変化するか予測した報告は見当たらない。

### 1.3 研究の意義

脊髄損傷者の現在と高齢期を想定した時の ADL 項目の差異を知ることは、脊髄損傷者への ADL 指導、援助方法、また脊髄損傷者自身の自己管理能力の高まりに繋がる。

### 1.4 目的

病院から退院し日常生活を取り戻している脊髄損傷者における現状と高齢期を想定した時の ADL 項目において困難と思う動作に違いがあるのか、また脊髄損傷者の自己効力感、ADL 項目と自己効力感との関係性について明らかにする。

### 1.5 リサーチクエスチョン

- ・現状と高齢期を想定したときの困難と思う ADL 項目に違いがあるのか
- ・ADL 項目において、現状と高齢期を想定したときに関係性はあるのか
- ・脊髄損傷者の自己効力感は高いのか
- ・現状と高齢期において差異のある ADL 項目と自己効力感の関係性はあるのか

## 第2章 方法

### 2.1 対象

日本チェアスキー協会に所属し、日常生活を取り戻している脊髄損傷者 72 名。

### 2.2 手続き

実施期間は、2010 年 10 月 21 日～11 月 3 日。郵送法による自記式質問紙調査を実施。

#### 1) 手順

日本チェアスキー協会事務局に研究への協力をお願いし協会会長から同意を得た。協会事務局から該当する脊髄損傷者を選出してもらった。調査票を郵送する前に、プレテストを実施した。郵送用の封筒は協会側から提供してもらい、郵送内容は、協会会長からの依頼文書、調査へのご協力をお願い、調査票、返信用封筒とした。

#### 2) 調査票の概要

調査票は A4 サイズ、計 5 枚の構成とした。

#### 3) 調査内容

①属性、②現在と高齢期を想定した時の困難と思う ADL 項目について、③GSES

### 2.3 分析方法

結果は PASW Statistics 18 を用いた。単純集計、クロス集計をし、GSES に関して t 検定を用い、名義尺度変数は  $\chi^2$  検定を用いて 2 群の比較を行った。

#### 2.4 倫理的配慮

倫理的配慮として、対象者に対して文書にて研究の趣旨、研究方法、調査への参加協力の自由意思と拒否権、プライバシー及び個人情報の保護について明記した。

### 第 3 章 結果

- ①対象の属性は、35 名（男性 34 名、女性 1 名）だった。平均年齢  $45.3 \pm 11.1$  歳（17～66 歳）、平均受傷時年齢  $22.3 \pm 9.2$  歳（0～39 歳）、平均受傷年数  $22.9 \pm 10.9$  年（7～42 年）、受傷レベルは頸髄損傷 4 名（11.4%）、胸腰髄損傷 31 名（88.6%）、麻痺型は完全麻痺 21 名（60.0%）、不全麻痺 14 名（40.0%）、受傷原因は先天性 3 名（8.6%）、外傷性 32 名（91.4%）だった。
- ②現状で一番に困難と感じる動作は、階段昇降、排尿管理、排便管理、床と車椅子間の移乗だった。
- ③高齢期を想定したときに一番に困難と思うであろう動作は、階段昇降、排便管理、排尿管理、床と車椅子間の移乗、入浴、褥瘡予防動作、車椅子と浴槽間の移乗だった。
- ④  $\chi^2$  検定の結果、排尿管理、排便管理、トイレの使用、屋内の移動、まとまった距離の移動、階段昇降、床と車椅子間の移乗に有意性が認められた。
- ⑤属性と GSES 得点および 3 因子得点の平均値の比較では、受傷年数、麻痺型、運動習慣に有意差が認められた。
- ⑥現状および高齢期を想定した時に困難と思う ADL 項目の個数と GSES 得点および 3 因子得点の平均値の比較では、有意差は認められなかった。
- ⑦ADL 項目における現在と高齢期の差異と GSES 得点および 3 因子得点の平均値の比較では、車椅子→トイレ移乗、床→車椅子移乗の 2 群間と GSES 得点および 3 因子得点の比較では、有意差を認めた。

### 第 4 章 考察

対象者全員が高齢期を想定したときには、ADL 項目において何かしら困難と思うことがあるということがわかった。機能・能力レベルを最大限に維持し、高齢期に向けて機能・能力の維持、改善を図り、また自助具・機器の適応や変更、環境整備を行う必要があるとも考える。高齢期を想定した時に移動、移乗動作のなかでも、上肢筋力を必要とするベッドと車椅子間の移乗、車椅子とトレイ間の移乗、車椅子と浴槽間の移乗、車椅子と車間の移乗、床と車椅子間の移乗が困難と思うと想定していることが明らかとなった。

対象の特徴は、自己効力感が高い集団であった。受傷年数が経過した群に自己効力感が高い結果となったのは、成功体験の蓄積がなされていること、自分がおこなおうとしている行動を他者が上手く行っている場面を見たり聞いたりしていること、自分の努力や成果を意識的に自分で認知できていることを年数が経過していく中で経験し、困難な状況に耐えられる心理面を構築できたためと推測できる。

### 第 5 章 今後の課題と展望

本研究では対象者が少なく、特定の集団での調査であった。脊髄損傷者の実態を把握するには、医療機関、在宅療養者が利用する医療機関外の脊髄損傷に関連した施設、団体を対象に含む必要があると考える。

文献

- 1) 千野直一：現代リハビリテーション医学改訂第3版．金原出版，2009 東京
- 2) 住田幹男,徳弘昭博,真柄彰,豊永敏宏,内田竜生編：脊髄損傷の outcome－日米のデータベースより－．医歯薬出版株式会社，2001 東京
- 3) 黒川陽子,住田幹男：高齢化．総合リハ，36(10)，959～963，2008.10
- 4) 古澤一成：職業復帰．総合リハ，36(10)，965～968，2008.10
- 5) 坂井宏旭,植田尊善,前田健,芝啓一郎：疫学調査．総合リハ，36(10)，969～972，2008.10
- 6) 住田幹男,杉原勝宣,徳弘昭博,真柄彰,内田竜生,元田英一：日本における高齢脊髄損傷の状況．日本職業災害医学会会誌，52，17～23，2004
- 7) 山中緑,田島文博,幸田剣,神埜奈美,小川隆敏,古澤一成,杉山宏行,池田篤志：脊髄損傷－とくに加齢との関連から－．総合リハ，35(10)，1055～1062，2007.10
- 8) 住田幹男,田中宏太佳,陳隆明,百瀬均編：脊損慢性期マネジメントガイド．NPO 法人日本せきずい基金 2010 東京
- 9) Menter RR:Issues of aging with spinal cord injury.In:Aging with Spinal Cord Injury.Isted,Whiteneck GG et al(eds),Demos Publication,New York,1-8,1993
- 10) Gerhart KA et al:Long-term spinal cord injury:functional changes over time.Arch Phys Med Rehabil 74:1030-1034,1993
- 11) McColl MA et al :Expectation of independence and life satisfaction among ageing spinal cord injured adults.Disability and Rehabilitation 21:231-240,1999
- 12) 川瀬真史,鈴木聡子,佐藤貴一,牧野均,林徹哉,金子実,小熊忠教：脊髄損傷者の加齢に伴う日常生活動作の変化．北海道理学療法士協会誌 第10巻 32～36
- 13) 川上泰雄：高齢者の骨格筋の形態と機能．Geriatr.Med.48(2),227-230,2010
- 14) 坂野雄二,前野基成：セルフ・エフィカシーの臨床心理学、北大路書房、2008、京都府
- 15) 問川博之,黒川真希子,出田良輔,里宇明元：脊髄損傷者のための新しい ADL 評価尺度－SCIM．JOURNAL OF CLINICAL REHABILITATION Vol.15 No.10 952～957 2006.10
- 16) 黒川真希子,問川博之,鈴木幹次郎,内川研,田中尚文,里宇明元：脊髄損傷自立度評価法(SCIM)の信頼性と妥当性に関する検討 Jpn Rehabil Med Vol.44 No.4 230～236 2007
- 17) 出田良輔,中村濃,須堯敦史,佐々木貴之,辻朋美,問川博之,椎野達,植田尊善：Spinal Cord Independence Measure(SCIM)の妥当性と信頼性の検討－FIM と BI との比較から－．理学療法福岡，21号，37～42，2008
- 18) 出田良輔,中村濃,須堯敦史,佐々木貴之,辻朋美,問川博之,椎野達,植田尊善：Spinal Cord Independence Measure の妥当性と信頼性の検討－SCIM と FIM との比較から．総合リハ，36(3)，283～287，2008.3